

# 自民大勝利、最大の敗者は大手メディア

シリーズ

日本が危ない!

傲るジャーナリスト  
一体何様のつもりか

終わってみれば首相、安倍晋三の思惑通り、衆院選は自民、公明両党が3分の2を超えた。朝日新聞などが「モリ・カケ」追及を徹底的に展開したにもかかわらず。その意味で、この選挙の「最大の敗者」は朝日新聞などのメディアにあるといってい

ていいだろう。投票日の10月22日、メディアの傲慢さを示す場面があった。テレビ東京系の開票速報特別番組「池上彰の総選挙ライブ」で、ジャーナリストの池上彰が自民党政調会長の岸田文雄にかみついたのだ。池上が怒ったのは、午後10時すぎに行われた党総裁でもある安倍との中継のインタビューの最中、安倍が話す背後で当選者名を読み上げる声や拍手が入ったためだ。池上は安倍に「聞こえますか、大丈夫ですか」と確認した。結局、中継は質問の途中で時間切れとなった。この後に行われた岸田との中継で池上は強い調子でこう告げた。

「中継の際は(当選の)読み上げなどは行わないルールのはず。こちらと安倍さんとのやりとりがうまくいかなかったことについて極めて異例なことだったと言明申し上げておきます」

事情を知らない岸田は「ご迷惑をおかけしたとしたら、お詫びを申し上げなくてはと思います」と謝罪した。

自民党から大事にされているNHK出身の池上にとっては、このような場面に遭遇することはなかったはずだ。テレビ東京の番組だから軽んじられたと思ったのかもしれない。池上は大物政治家がムキになるような質問をぶつけ、それが人気を呼び、民放ではこのところ選挙報道で毎回視聴率がトップとなっている。インターネット上では「池上無双」と評されている。自身の「力」を見せつけるために、岸田に強い調子で苦情を言ったのかもしれないが、そのネット上では逆に評価されるどころか「何様のつもり」などの酷評が寄せられた。

## 野党投票に誘導するメディア 選挙中に浮動層に投票行動を

池上だけでなく、テレビ朝日系の開票速報番組「選挙ステーション」では、司会を務めたジャーナリストの田原総一郎が視聴者から寄せられた意見に激怒する場面があった。アナウンサーが、視聴者からの意見として「今が完璧ではないが、野党が酷すぎる。安倍総理はやりたいたいことをしっかり形にしてほしい」と紹介した。すると、田原は途中で遮り「ちょっと待って。野党が酷すぎるってどういうことなんだよ」と怒鳴った。

この2人の発言は投票後の発言だが、露骨に投票に影響を与えようとしたのがTBS番組「サンデーモーニング」だった。選挙期間中の15日の番組では、野党に投票を促すかのような発言があった。番組に出演した東大名誉教授の姜尚中はこう述べた。

「見どころは選挙の中で野党のピックアップが起きるかどうか。選挙後にどこが主導権を握るのか。投票先を決めていない

54.4%の人は選挙に行かなければいけない。そして次回に何をするか賭けてみる必要がある」

評論家の大宅映子も続いた。「民進党が(都知事の)小池百合子に合流したことで野党が結集し、日本の分岐点になると思ったが、戻つてみれば。投票先を決めていない54.4%に期待している。貧しい選択であろうと行かないと白紙委任になってしまうわけですから。ぜひとも(投票に)行ってください」

明らかに野党側に投票するよう呼びかけるような発言だ。

## 「モリ・カケ」偏向報道 前川・加戸発言に落差

放送法4条では「政治的に公平であること」を求めている。TBSをめぐっては、「モリ・カケ」の一つ、加計学園問題に関する報道をめぐり、安倍に「行政を歪められた」と主張した前文部科学事務次官、前川喜平の発言を大きく取り上げながら、逆に疑惑を否定した前愛媛県知事の加戸守行の発言はほとんど報じなかったと批判

### 森友・加計問題に関する衆院選の記事 (10月11日付~22日付朝刊)

産経	行数	面積	主な記事の見出し
産経	0	0分	なし
朝日	1172	2.2分	「安倍首相の信任焦点 憲法、増税、原発、森友・加計」(11日付1面)、「森友・加計」語りぬ2人」(16日付社会面)
毎日	483	1.2分	「加計・森友 首相第一声触れず」(11日付2面)、「森友・加計」論戦空回り」(20日付5面)
読売	48	0.1分	「野党、獣医学部誘致訴え」(17日付2面)
日経	378	0.6分	「加計・森友 疑念晴れず 地元有権者 困惑・怒り」(12日付社会面)「森友・加計 議論深まらず」(18日付政治面)

されている。

これはTBSだけでない。一般社団法人日本平和学研究所の調査によると、10月10日から11日までに計30の番組が合わせて8時間36分23秒間、この「モリ・カケ」問題を報じた。このうち前川のことは2時間33分46秒にわたり取り上げたのに対し、前川に反論した加戸の発言はわずか6分1秒しか報じなかった。

新聞でも朝日新聞や毎日新聞がモリカケを熱心に報じた。産経新聞は選挙期間中の主要紙のモリカケに関する報道ぶりをまとめた。それによると、朝日新聞が1172行にわたり取り上げた。新聞1ページ分換算で2.2ページ分とダントツだった。続いて毎日新聞が483行、1.2ページ分だった。これに対し、読売新聞や日経新聞、産経新聞が報じた量は1ページ分に満たない。

これとは対照的に、北朝鮮・安全保障問題では産経新聞が1627行、3.5ページ分と最大のスペースを割いた。続いて朝日新聞が1034行、1.9ページ分だった。もっとも、その内容は異なる。産経や読売は北朝鮮危機に警鐘を鳴らし、対策を講じる必要性を報じた。これに対し、朝日や毎日には安倍が支持拡大のため北朝鮮危機をおおっていると、争点化を否定するような姿勢が目立った。

## 朝毎と安倍が激論 毎日と加計は「お友達」

「モリ・カケ」をめぐる象徴的なやりとりが公示直前の8日の日本記者クラブ主催の党首討論会でおきた。

安倍が7月10日の国会閉会中審査での加戸の証言で、国家戦略特区として加計学園の獣医学部設置が認められたことについて「歪められた行政が正された」などと発言したことを「朝日は次の日は全く



自民党の歴史的な大勝利に終わった衆議院選挙。選挙中も選挙後も、感情的に自民党を批判する大手メディア。その偏向報道ぶりに、国民から見限られている。

報道していない」と指摘した。すると朝日新聞論説委員の坪井ゆづるは「(報道)しています」と即答した。

安倍が「本当に胸を張って(報道)しているということが出来ますか」と問うと、坪井は「できます」と答えた。

坪井はそう言ったが、朝日新聞の11日朝刊の記事をみても、加戸発言はどこにも見当たらない。審査の詳細のなかで20行ほど取り上げているだけだった。これをもってどうして坪井は取り上げていると強弁したのだろうか。逆に朝日は、官邸に反旗を翻した前川の発言は大きく報じたのであった。

討論会で坪井とともに質問した毎日新聞専門編集委員、倉重篤郎は安倍の発言を遮り、「私がきいているのはそこじゃありません。あなたのお友達が優遇されたことに責任を感じないんですか」と詰問した。あまりに非礼な態度である。

毎日新聞社は加計学園の創立50周年のとき、大阪本社からヘリコプターを飛ばし、上空から当時の社長、朝比奈豊の祝辞と花束を投下した。客席では大阪本社副代表の園崎明夫が花束を贈呈し、祝辞を読み上げた。加計学園によると、花束投下は30周年式典や、加計学園傘下の千葉科学大の開学式でも行われたという。

ベテラン記者の倉重が毎日新聞社と加計学園の「お友達」関係を知らないはずがない。自社のことは棚に上げて、安倍を批判するのはまさにちゃんちゃらおかしい。

## 選挙結果、冷静に分析せず 関心高かった北朝鮮情勢

選挙結果をみると、テレビ局や朝日新聞などの主張が受け入れられたかは明白であるが、朝日の反応は違った。投票日翌日の社説では次のような「珍説」を展開した。

「政権継続を選んだ民意も実は多様だ。選挙結果と、選挙戦さなかの世論調査に表れた民意には大きなズレがある」

「首相は勘違いをしてはならない。そも

### 北朝鮮危機に関する衆院選の記事 (10月11日付~22日付朝刊)

産経	行数	面積	主な記事の見出し
産経	1627	3.5分	「迫る危機 問われる覚悟」(11日付1面)、「国難を問う 米の北攻撃準備に2カ月」(12日付1&3面)
朝日	1034	1.9分	「国難突破」解散の方便か」(12日付社会面)、「武装難民」発言に物議」(19日付社会面)
毎日	498	0.9分	「国難」なぜ選挙?」(15日付1面)、「白紙委任求める首相」(15日付3面)
読売	741	1.5分	「対北、安保法制で応酬」(11日付3面)、「北の核 身を守る個人」(13日付社会面)
日経	317	0.6分	「外交・安保議論深まらず 対北朝鮮、立場の差小さく」(13日付2面)

そも民主主義における選挙は、勝者への白紙委任を意味しない」

毎日新聞政治部長の佐藤千矢子も「憲法改正も北朝鮮情勢も、有権者は決して白紙委任したわけではない」と主張した。もちろん、さまざまな声に耳を傾けることは必要ではあるが、両紙にはなぜ自民党が勝利したかの冷静な分析がなかった。

NHKが22日に実施した出口調査(約27万3千人が回答)によると、今回の投票で重視した項目として挙がったのが①消費税率の引き上げへの対応29%②憲法改正への対応23%③北朝鮮問題への対応16%の順だった。読売が20日付で掲載した中高生9千人を対象にしたアンケートでも、全体の3割が最も関心のある政治テーマとして「北朝鮮情勢」を選び、トップとなったという。

## 悔しい自民党選挙圧勝 メディアを見限る国民

核や弾道ミサイル実験を続ける北朝鮮に対し、米国は空母群や巡航ミサイルを搭載可能な原子力潜水艦「ミシガン」を朝鮮半島に派遣するなど、かつてないほど緊張は高まっている。にもかかわらず、副総理兼財務相、麻生太郎が北朝鮮有事の場合、武装した難民への対応を考えるべきだと発言すると、朝日は『武装難民』発言に物議(19日付)との見出しで、抗議声明を出した弁護士らの「危機感をあおっている」などの声を紹介した。

朝日の名物コラム「天声人語」に至っては「(公示日の安倍の)演説中の目に不安の影がうかがえた」「地元産米のおにぎりをほおぼる表情もこぼれていた」などと、一方的な描写が続いた。選挙結果が朝日や毎日の望んだような結果にならなかったことがよほど悔しいようだ。

作家の門田隆将はオフィシャルサイトでのブログで「偏向報道をもとに『モリ・カケ』を延々と問題化してきたマスコミや野党に対して、有権者はとっくに『愛想を尽かしていた』のである」と評した。

「テレビの開票速報を見てみるとTBSやテレビ朝日を筆頭に、自民圧勝という事実を前に、悔しくてたまらないキャスターたちの顔が並んだ。それを見ながら、『ああ、相変わらずこのヒトたちは、なんにもわかっていない』と、あらためて思った向きは少なくないだろう」

門田が指摘するように、新聞やテレビが「確かな情報を真摯に国民に伝え続けていたら、これほどの『影響力の低下』はなかった」ことだろう。それを「自分たちが『世論を左右している』と未だに思い込んでいるのだ」。

「モリ・カケ」問題にみられたように「ファクト(事実)に基づかない偏った報道をつづける既存メディアは、さすがに国民に『ソッポを向かれてしまった』(門田)といえるだろう。(敬称略)